

がらがら橋日記

宮森 健次

この夏

ちょうど40になった夏に初めて高山を経験した。

「デビューが槍ヶ岳なんてちょっとないよ」と山を知る人には言われる。でも、自分が選んだわけでもなく、知識もなければどこだって同じだ。高山病になったら、滑落したら、同行者のペースについていけなかったら、などなど不安だらけの山行だったが、無事に行き帰ることができた。とにかくいっぺんだけでも経験してみよう、それでつまらなかったら終わり、思っていたことはただそれだけだった。

はまった。それから毎年行った。日本の名だたる名山を次々とこの目で見、この足で踏んだ。登山が自分の体や心との絶えざる対話であることも知った。親しい友人たちといっしょだろうと、登っているときは孤独なのだ。決して雑音の入ることのない信頼できる孤独。それは山に行くことでしか手に入らない。そして帰るときは、山に置いていく。リュックに詰めるようには心には取まらない。信頼を得るためには、また山に向かうしかない。

この夏、ぼくは山に登らなかった。18年目で途切れた。そうせざるを得なかった。

「ごめんさい。今年は行けません」山仲間メールをした。「山は逃げません。そういう時もあります。お察しします」と返信が来

た。

夏が終わると、職員室の机の上には職員が置いた土産物が目にとまる。ハワイだの台湾だの、京都だの東京だの。それぞれが過ごした夏を語りかけてくる。

「どっか行かれましたか。」

ある職員に尋ねられる。そう、去年はあなたからそう聞かれて、山形の月山に登った話をしたっけ。

「足が痛かったのに出羽三山をめぐっているうちに嘘のように治ったよ。」

「へえ、すごい。」

「ああ、まさかと思うようなことがほんとに起きたんだ。」

自分のことを話すなんて嫌いだし、問われて答えていても相手の顔に退屈が浮かばないかといつも気にしているのに、ついついしゃべってしまっていた。

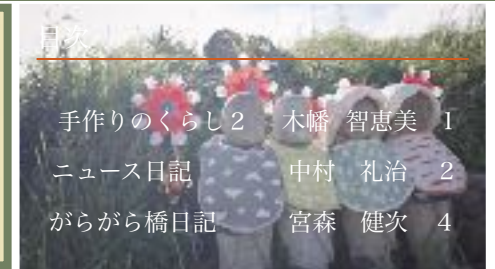
きっと職員は、勢い込んで話すばくを覚えていて、今年も喜ばしてやろうと思ったのだ。その心遣いに感謝しつつ。

「いや、どこにも行けなくて。」

「あら。」

「そんな年回りになったってことでね。」
言ってぼくは苦笑する。

山には行けなかった。けれども、その代わりに得たものもまたぼくにとっては、やっばり大切なものだ。ちよっぴり孤独には弱く



手作りのくらし2

19 セーター(2)

木幡智恵美

まず鎖目の作り目を80にして編み始めた。立ち上がりの鎖目を3にして1段目を長網で編み始める。一段目が終わり、見本のセーターに当ててみると、少し長い気がする。下の部分はゴム編みにするつもりだ。そうすると、縮んでいくからこれくらいでいいか、と自分に言い聞かせながら6段ほど編んだ。それでも長い。いや長すぎる。解きにかかる。毛糸は何度でも解いて編み直しができるのがいい。

今度は作り目を60にしてみる。1段目をセーターに当ててみると、ちょうどいいくらいの長さだ。それでゴム編みで6段ほど編んでいったが、ゴム編みだから縮むので、セーターに当てると幅が短い。でも、その上の段からはこま編みだから、ちょうどいい長さになるだろうと、編み進めていった。編み進めながら、紙に目数を書いていく。前身ごろと同じ目数で後ろ身ごろを編んでいかねばならないので、記録しておく必要があるのだ。

模様はどうしよう。複雑なものではできな

い。濃緑の地に、まずは青みがかった薄緑の毛糸を2段ほど編み、濃緑をその上に2段、その次は黄緑6段、その6段に間に青みがかった薄緑の毛糸を点々と入れてアクセントにしよう。模様は夢中になって編んでいったが、やはり気になるのは大きさだ。セーターに当ててみると、やはり小さい。ここまで、騙し騙し編んできたものの、やはり、気にかかって仕方がない。これは、やはり小さいのだ。着てみて小さければ、どうしようもない。胸のあたりまで編んでいたのを、全部解いた。

結局作り目を70にして編み直す。それでセーターに合わせて、少し大きいけれど、これならいいかというサイズで何とか前身ごろを編み終えた。

出来上がった前身ごろに合わせて後ろ身ごろを編み始める。胸のあたりまで編んでいた時、はっと気が付いた。わっ、前身ごろの模様の部分、濃緑が1段抜けているではないか。

ニュース日記 704

中村礼治

愛知県知事に敬意を表する

30代フリーター やあ、ジイさん。慰安婦を象徴する少女像の展示に対する抗議や脅迫で中止に追い込まれた「表現の不自由展・その後」には「国のお金も入っているのに、国の主張と明らかに違う」（名古屋市市長・河村たかし）「主催者たる愛知県（および補助金を出した文化庁）が、外交ルールに違反してきた韓国政府を支持すると表明するに等しい」（経済学者・池田信夫）といった批判があった。

年金生活者 そうした考えの背後に感じられるのは、アジアに根強く残る前近代的な国家観だ。近代国家を個人の自由を保障するシステムではなく、逆に制約する装置と考え、国家と個人を別々の存在ではなく、地続きのもののみならず国家観とっていい。

近代的な国家は、表現の自由を保障するために、それを妨げないだけでなく、自らの再分配機能を使って、個人に表現の自由を行使する費用と機会を提供する。たとえば政府、行政の方針に反する表現であってもだ。愛知県も文化庁もそれを前提に費用の負担を約束したはずだ。

展示に抗議、脅迫が相次いだという少女像の表現主体はその作者であって、愛知県でも文化庁でもない。主催者あるいは助成者として展示を認めたからといって、「韓国政府を支持すると表明する」ことにはならな

い。両行政機関は表現の自由を行使する場を用意しただけであって、表現の主体、したがって「表明」の主体にはなり得ない。

30代 「表現の不自由展」を中止したことは表現の自由の抑圧にならないか。

年金 「ガソリン携行缶を持ってお邪魔する」とテロを予告するようなファクスなどもあり、安全を保つことが困難になったことを中止の理由のひとつに主催者はあげている。この点に限って言うと、こういうときこそ警察に警備の強化を求めるべきだ。安倍晋三の選挙演説をやじっただけで強制排除するような、自由を抑圧する警察を、表現の自由を守る警察へと変えていくチャンスにするべきだ。

30代 学生時代にデモで機動隊と衝突を繰り返したジイさんには、警察の世話になることに抵抗感があるんじゃないか。

年金 それは否定しない。しかし、警察官は国民が雇った公僕であり、国民が自らの自由を守るために公僕に行動を求めるのは当然だとも今は考えている。

かつては自衛隊の災害派遣に反対する主張が左派や進歩派からよく出された。普段できない防衛出動や治安出動の訓練として利用されるなどというのがその理由だった。だが、派遣の実績を重ねるうちに、災害から住民を守る自衛隊というイメージが

国民の間に定着した。それは自衛隊が軍事行動に向かうことにブレーキをかける潜在的な力になっているはずだ。同様のことを警察に求めていいと考える。

30代 「表現の不自由展」を中止した主催者に対し、「騒ぎになるのはわかっていたのに、その覚悟もなかったのか」といったたぐいの批判が投げつけられるのをネット上で見かける。表現の自由の行使には相応の代償を払えと言いたげだ。

年金 マルクスは労働を「人間と自然とのあいだでの素材のやりとり」と考えた（『資本論』今村仁司ほか訳）。「やりとり」が交換のことだとしたら、人間と自然の間で行き来するのは素材そのものではない。「人間は生産するときには、ただ自然そのものと同じようにふるまうことしかできない。すなわち素材の形を変えることしかできない」（同）。「素材の形を変えること」を自然に手を加えること、自然をわがものにすると考えれば、人間はその代償として「自然そのものと同じようにふるまう」、言い換えればおのれを自然に属するものとしなければならない。そこでは自然の人間化と人間の自然化とが交換される。

「素材の形を変えること」、自然に手を加えることは、おのれを自然から解放する

こと、自然から自由になることを意味する。その代わり、「自然そのものと同じようにふるまう」こと、おのれを自然に戻すことを強いられる。

30代 それを自由の代償と呼ぶなら、表現の自由の行使もまた、脅迫や圧力といった代償を支払わなければならないということになるのか。

年金 人間はそうした代償の負担を回避する努力を積み重ねてきた。脅迫や圧力を、代償として受け入れるべき対象ではなく、排除すべき対象として扱ってきた。それもまた自由を拡張する努力にほかならない。その結果が憲法や法となった。

人間は労働によって自分が自然化されても、その自然化された自分を再び労働によって人間化する。つまり、自然から自由になる代償の負担を回避する努力を続ける。それが技術やシステムの発達を促してきた。

愛知県知事の大村秀章は「表現の不自由展」を中止して批判されたが、私は彼に敬意を表したい。この企画展は過去に公的な美術館などで撤去されたり、展示を拒否されたりした作品を集めたものだ。いろんな公的機関がその種の催しを拒むようになってい中で、大村は県のトップとしてそれにあらがい、表現の自由を広げようとした。中止は表現の自由の侵害に当たるが、戦った末の